

エピソード42

音に過敏な子どもの様子を
保護者に伝えました。



なみちゃん

小学校教師として25年以上の経験が
あります。
エデュサポネットのファシリテーターです。



熟年の先生が中堅の頃、小学校2年生を担当したときの経験をお聞きします。

小学校1年生のときから担任していたあきら君は、2年生になってから、音をととても気にするようになりました。

最初はリコーダーの音を聞いて「耳が痛くなった。頭も痛くなった。」と言いました。





あきら君の様子は、その後どうでしたか。

他の音にも反応するようになり、鈴の音、椅子を引く音、と増えていきました。

学校にはいろいろな音があります。とうとう教室にいられなくなってしまい、隣の図工室で学習してもらったほどでした。





あきら君の保護者は、
様子を聞いてどうでしたか。

お母さんは「コンサートに行ったとき、
会場にいられなくなったことがあったが、
興味がなかったのだと思った。音が嫌だと
言ったことはない」と困惑されていました。

あきら君は、関心がある話には夢中になり
ますが、関心がないことには、まったく
興味を示さないところがありました。





その後、どんなことがありましたか。

あきら君を図工室で観察してくれた
特別支援コーディネーターの先生から、
「どんな音に反応しているか、少しの間
記録して保護者に伝えてあげるといいよ。」

耳栓やイヤーマフが必要なレベルか、
知らないとね。」と言われました。





コーディネーターの先生は、
気づいたことがあったのですね。

先生は「それともうひとつ。あきら君は
将来のためにとって、お母さんから習い事を
勧められ、現在週4日も行っているんだよ。

図工室でも、今日の宿題ができるかなって
心配していたよ。」と教えてくれました。





コーディネーターの先生が教えてくれたことから、どんなことを考えましたか。

私は、あきら君が音に敏感なことばかり心配していたけれど、あきら君の背景に目を向けていなかったことに気づきました。

学校だけじゃなく、家庭での様子とか、どんな環境で生活しているか、子どもの背景を知ることも大切だと思いました。





先生は、コーディネーターの先生と協力したのですね。

あきら君がどんな音に反応しているのか、観察して記録しました。お母さんは、その記録を小児科医に見せて、相談しました。

またお母さんは、あきら君の言葉を伝えると、ハッとした様子でした。





なみちちゃんの一言

- いろいろなものに対して、過敏な子どもたちがいることがわかってきています。
- 普段の生活をよく観察することで、解決の方向が見えてくることもあるのですね。
- 子どものふとした一言から、家庭での生活が垣間見えることがあります。そんなつぶやきに、子どもの不安を感じたときは、家庭と協力して見守っていきいいてですね。

お・し・ま・い



イラスト 尾上樹里
(北海道教育大学 大学院生)